

## 『森の生活』

ヘンリー・D・ソロー著 — 岩波文庫、宝島社他

## 稲本 正 (いなもと・ただし)

オークヴィレッジ代表。工芸家、作家。1945年富山県生まれ。69年立教大学理学部物理学科卒業後、同大学に勤務。74年飛騨高山の農家の納屋を出発点に、オークヴィレッジを創設し、76年清見村(現 高山市清見町)に工芸村「オークヴィレッジ」建設を開始する。87年環境を軸とした総合プロデュース会社「オークハーツ」を開設。91年清見村に「木の文化」を担う新しい人材の養成機関として「森林たくみ塾」を開設。93年倉本聰、C・W・ニコル氏らとともに、自然保護・回復を目指して活動する作家たちのグループ「自然文化創造会議(C.C.C.)」を創設。主な著書は、『森の形 森の仕事』(世界文化社)など。

推薦者

木や森について書かれた本はたくさんあるが、あえて一冊を、とえば、やはり『森の生活』(ヘンリー・D・ソロー著)を挙げざるを得ない。私が東京での原子物理の研究を辞め、飛騨高山に移り住む決意を促した本の一冊が『森の生活』である。

原題は『ウォールデン』で、ソローがアメリカのマサチューセッツ州のコンコードという町のはずれにあるウォールデン湖の側に、自作の小屋を建て、森の中で過ごした2年2カ月をドキュメンタリー風に綴ったものだ。ただ単にどのような生活をしたかだけでなく、自然との対峙の仕方、文明のあり方、人生の価値などの思索が格調高い文章で迫ってくる。

ところが、私が『ソローと漱石の森』で書いたように、正直、極めて読みづらい本だ。日本の江戸時代に書かれた本で、原文の文体そのものが難解で「現代アメリカ人向けに翻訳が必要だ」と言われるくらいだ。

さらに、日本語には訳しづらい比喻や洒落があり、それでいて深遠な思想なのでそれらがいまって、その内容が伝わりづらいからだ。が、そんなことは気にせず、なにしろ「自分も森に住んだらどう考えるか」と、ソローの立場になって読んでほしい。すると、現代人がハッとする指摘をしているのがわかる。

単に森の生活の中で感じる情緒的で文学的な表現だけでなく、例えば「50ぐらいの年輪がある薪を燃やしてみると、その中心部が炎となったとき、50年前に固定されたCO<sub>2</sub>の炭素が今また出てきたことになる」などという科学的見地にも出会う。なにしろ、詩的文学者であり、森林科学者なのだ。

最後に、近代文明の限界と新たな文化・文明の到来を期待したこの本の末尾の文章が良い。

「・・・ぼくらの目を眩ませる光は、ぼくらにとって闇だ。ぼくらが目覚めるときにこそ、夜明けは訪れる。まだまだたくさんの日が眠ったままで、夜明けを待っている。太陽は暁の明星にすぎないのだ。」(葉月陽子訳) CEL



## Books : editor's choice

- 『木のいのち木のころ一天・地・人』西岡常一 草思社(1993年)
- 『森にかよう道—知床から屋久島まで』内山節 新潮社(1994年)
- 『木—アジア発こどもエコロジーブック』ユネスコ・アジア文化センター 千葉茂樹訳 小学館(1997年)
- 『木のある生活—つかう・つくる・たのしむ』秋岡芳夫 TBS・ブリタニカ(1999年)
- 『近くの山の木で家をつくる運動宣言』緑の列島ネットワーク 農文協(2000年)
- 『木がわかる—知っておきたい木材の知識』佐道健 学芸出版社(2001年)
- 『雑木林へようこそ—里山の自然を守る』広井敏男 新日本出版社(2001年)
- 『木造都市の設計技術』小林正美他 コロナ社(2003年)
- 『探究「鎮守の森」—社叢学への招待』上田正昭編 平凡社(2004年)
- 『森のスケッチ』中静透 東海大学出版会(2004年)
- 『木の教え』塩野米松 草思社(2004年)
- 『「木組の家」に住みたい!—無垢の木で丈夫な家づくり』松井郁夫 彰国社(2004年)
- 『森と生きる』稲本正 角川書店(2005年)
- 『森林バイオマス最前線』大場龍夫 林業改良普及双書(2005年)
- 『木を植えよ!』宮脇昭 新潮選書(2006年)
- 『日本の森と木の職人』西川栄明 ダイアモンド社(2007年)
- 『木育の本』煙山泰子 西川栄明 北海道新聞社(2008年)
- 『森の力—育む、癒す、地域をつくる』浜田久美子 岩波書店(2008年)
- 『地域生態学からのまちづくり—共生環境のマネジメント』上甫木昭春 学芸出版社(2009年)
- 『それからの森—八ヶ岳倶楽部II』柳生博 講談社(2009年)
- 『ぼくたちは何を失おうとしているのか—ホンネの生物多様性』関口威人 樹林舎叢書(2010年)
- 『新版 森と人間の文化史』只木良也 NHKブックス(2010年)